K-508

米沢市埋蔵文化財調査報告書　第11集

左沢

米沢市教育委員会

序　　文

米沢市には東北地方屈指の古墳群を有する戸塚山を始めとして数多くの埋蔵文化財があります。私たちの祖先が残した遺跡を調査し保護保存を図っていくことは、先人たちへの畏敬ではないかと思います。

この度、本市教育委員会では、市道である左沢・木舟線の改良工事に伴い、本市南の位置する左沢遺跡の発掘調査を行い、その調査報告書を刊行することになりました。

縄文時代後期中葉の遺跡であります左沢遺跡から山形県内においても数十点しか発見されていないスタンプ状土製品が墓壙内より出土しております。また、出土器の多くは、種々の特徴から、当時の関東文化圏の影響を受けていることも解明されました。

本調査の詳細な結果は本文に譲りますが、その成果については市民の皆様の埋蔵文化財保護意識を高めることに大いに効果があったと自負しております。本報告書がいささかなりとも考古学研究者の方々に参考にしていただければ幸甚です。

最後に、本調査に多大なご協力を賜りました米沢市建設部土木課と地元赤崩入地区の皆様に心から感謝申しあげます。

昭和59年 3月 12日

米沢市教育委員会

教育長　北　目　二　郎

例　　言

1．本報告書は，昭和58年５月６日～同年６月６日に実施した，米沢市大字赤崩字左沢地内の市道拡張工事に伴う緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は米沢市教育委員会が主体となって，米沢市土木課と協議のうえ実施したものである。

3．調査体制は次の通りである。

調査総括　黒田信介　米沢市教育委員会社会教育課長
調査主任　手塚　孝
同副主任　亀田晃明，菊地政信
調 査 員　小松佳子，樋口真紀
調査協力　加藤　稔，橋爪　健，佐藤鎮雄，上村秀春，相原淳一，山形県教育庁文化課
　　米沢市土木課，地元赤崩入地区（左沢，木舟，石木戸），まんぎり会
作 業 員　田中正三，伊藤義之，高橋義雄，高橋留次，高橋　実，伊藤清美，後藤字太郎
　　藤巻豊明，藤巻正次郎，斉藤松子，斉藤トク，鈴木こう，我妻徳枝，田中絹江
　　後藤艶子，藤巻まさ子，上村マサ子，高橋イセオ
事務局長　引地孝忠
事 務 局　木村琢美，金子正廣

4．挿図縮尺は，遺構を60分の１，80分の１，土器の実測図，拓影図を３分の１，石器の実測図は，1.5分の１，３分の１，凹石，磨石は４分の１，石皿は５分の１とした。写真図版は，完形土器については縮尺不同，土器片は２分の１とした。北の方向は真北に統一した。

5．石器の実測図の中で「├――┤」は使用痕を示した。石器，礫の分類は，米沢市埋蔵文化財調査報告書第８集（手塚，菊地　1983）を基準として分類した。

6．遺構等の土層については，「新版標準土色表」（小山1973）等を参考にした。

7．本書の作成は，手塚，菊地が担当し，編集は菊地・責任校正は木村琢美が担当した。

本　文　目　次

序　文
例　言
1．遺跡の概要 …… 1
2．調査の経過 …… 3
3．層　序 …… 6
4．遺構の概要 …… 6
5．遺物の概要 …… 11
6．石　器 …… 11
7．礫　器 …… 13
8．土　器 …… 25
9．まとめ …… 28

挿　図　目　次

第1図　左沢遺跡と周辺の遺跡分布図 …… 2
第2図　左沢遺跡グリット配図 …… 4
第3図　左沢遺跡遺構平面図 …… 5
第4図　左沢遺跡第Ⅲ層面遺構平面図 …… 7
第5図　左沢遺跡第Ⅳ層面遺構平面図 …… 8
第6図　左沢遺跡第Ⅴ層面遺構平面図 …… 9
第7図　左沢遺跡出土石器実測図(1) …… 12
第8図　左沢遺跡出土石器実測図(2) …… 14
第9図　左沢遺跡出土石器実測図(3) …… 15
第10図　左沢遺跡出土礫器実測図(1) …… 16

第11図　左沢遺跡出土礫器実測図(2) …… 17
第12図　左沢遺跡出土礫器実測図(3) …… 18
第13図　左沢遺跡出土土器拓影図(1) …… 30
第14図　左沢遺跡出土土器拓影図(2) …… 31
第15図　左沢遺跡出土土器拓影図(3) …… 32
第16図　左沢遺跡出土土器拓影図(4) …… 33
第17図　左沢遺跡出土土器拓影図(5) …… 34
第18図　左沢遺跡出土土器実測図(1) …… 35
第19図　左沢遺跡出土土器実測図(2) …… 36
第20図　左沢遺跡出土土器実測図(3) …… 37
第21図　左沢遺跡出土土器実測図(4) …… 38

付　表　目　次

第1表　左沢遺跡周辺の遺跡地名表 …… 1
第2表　左沢遺跡出土石器形態分類表 …… 19
第3表　左沢遺跡出土石器計測表 …… 22
第4表　左沢遺跡出土礫器計測表 …… 24
第5表　左沢遺跡出土礫器形態分類表 …… 24

1．遺跡の概要

左沢遺跡の発見は，昭和57年（1982年）の秋に米沢市教育委員会が実施した，米沢市全域に於ける埋蔵文化財分布調査の際に確認された遺跡である。農家の「育苗用土砂」として採土した中から土器や石器が偶然に出土することが，地元の藤巻豊明氏によって認知され，遺跡発見の直接のきっかけとなった。その後，本遺跡は面積約22,100㎡を有する縄文後期中葉の集落地として米沢市遺跡登録番号「No.129」に登録された。

本遺跡は，米沢市大字赤崩字左沢地内の標高396m ～400m の西流する左沢川によって形成された河岸段丘上と段上下の東西170m，南北130m にある。現況は原野，畑，水田，道路となっている。

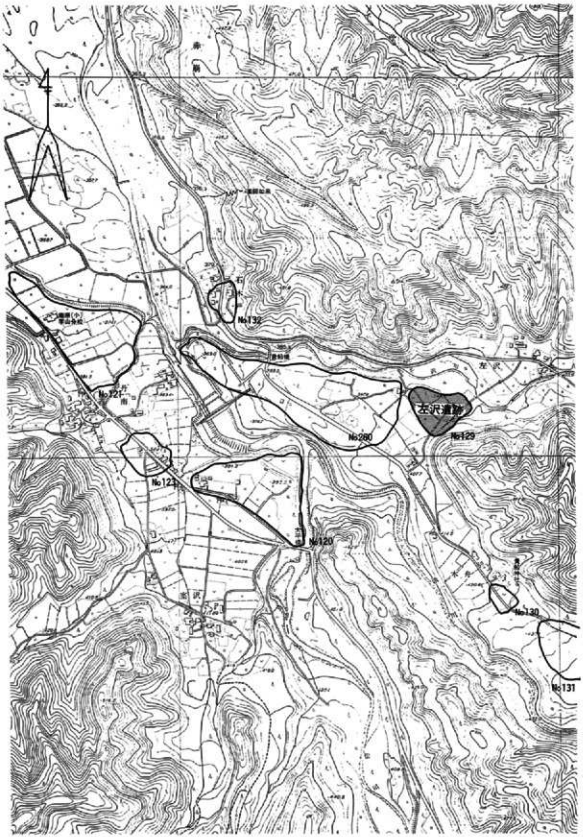
左沢川は，米沢盆地の東方を北流する最上川の支流に当り，同様に渋川，横川，それに松川があり，いづれも本市南端部の吾妻連峰山麓より源を発す。渋川はその名が示す様に，飲料すると「しぶい」ことから命名された河川名である。これは硫黄分を含む為であり，吾妻山麓には豊富な硫黄鉱脈があり，昭和２年頃から試掘調査が行なわれ，昭和11年頃になって㈱南羽工業が創設され東北でも有数の硫黄鉱山として操業を開始した。それ以後，㈱山形鉱業西吾妻工業所と社名を変更して（昭和21年），昭和36年まで採掘が続けられた。この硫黄鉱山が開山された数年後に発生した大洪水の際に有毒物を沈殿していた貯水地が決壊した為に松川流域は，死の川となってしまった。現在も松川と呼ばれる流域には魚類の姿を見ることはできない。しかし雛をのがれた左沢川には，イワナが今も生息しており，流出以前の松川流域の面影を残す。

次に左沢遺跡周辺の遺跡については第１図に示した東西1.5km，南北2.2kmの範囲に限定し，詳細については第１表を参照願いたい。

第１表　左沢遺跡周辺の遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	遺跡の状況	面積約（㎡）	種別	出土遺物	年代
No. 20	丹南遺跡	米沢市大字南原字丹南	河岸段丘	畑・大半が水田	28,000	集落地	土器・石器	縄文中期～晩期
121	李山遺跡	米沢市大字南原字李山	河岸段丘	畑・宅地 水田	96,600	集落地	土偶・土器 石器	縄文中期後葉
123	室沢遺跡	米沢市大字南原字室沢	河岸段丘	水田・畑	800	集落地	フレーク	縄文
129	左沢遺跡	米沢市大字赤崩字左沢	山麓から張り出す舌状台地	水田・畑 山林	22,100	集落地	土製品・土器・石器	縄文後期中葉
130	貴船神社Ａ遺跡	米沢市大字赤崩字貴船	山麓	畑・水田 山林	6,300	集落地	フレーク	縄文
131	貴船神社Ｂ遺跡	米沢市大字赤崩字貴船	山麓	山林	20,900	集落地	フレーク	縄文
132	石木戸遺跡	米沢市大字赤崩字石木戸	河岸段丘	畑	9,600	集落地	石器・フレーク	縄文
260	石木戸南遺跡	米沢市大字赤崩字石木戸	山麓から張り出す舌状台地	水田・畑 山林	96,900	集落地	土器・石器	縄文

現在までに，この地域には，８ケ所の遺跡が確認され，河岸段丘や舌状台地を選定し，特に河川が合流する流域に大規模な遺跡群（No.20,121,260）を構成する。No.132はNo.260のの舌状台



第1図　左沢遺跡と周辺の遺跡分布図

地の末端部東方を西流する左沢川の対岸にあり,遺跡の中央を走る市道を南進した地域に,№130・131の両遺跡が存在する。この地区内には貴舟神社で有名な赤崩地区の最上流に位置する木舟部落がある。遺跡は集落地の南方山麓に広がっている。

2．調査の経過

左沢遺跡の東南端部を，左沢と木舟を結ぶ市道拡張工事地として昭和58年に着手することから土木課との協議により，工事着工前の58年６月上旬までに,道路敷地部分となる遺跡範囲の約400㎡を対象として，米沢市教育委員会が，埋蔵文化財緊急発掘調査として実施した。

調査は，工事上の施工期間を考慮し，６月上旬を終了予定に５月６日より着手する。グリット設定は，道路敷地範囲に合せ10m ×10m の各１区を基本単位に西側よりⅠ～Ⅶ区と配した。

Ⅰ区・Ⅱ区はすでに道路として使用され，また削平によってすでに破壊されたことから，Ⅲ区～Ⅶ区を調査範囲に限定し，斜面を有するⅢ区以外は，重機による表土剝離から調査を開始する。さらに，道路幅に沿って，層位確認用のトレンチを幅１ｍの範囲でⅢ区～Ⅳ区の北側に配した結果，平地はⅢ層～Ⅴ層の基本層を有し，またⅣ区中央からⅦ区にかけては，旧左沢川の河原跡であり，Ⅳ区中央からⅦ区までは，遺物，遺構が存在しないと認められることから調査範囲をⅢ区・Ⅳ区とした。

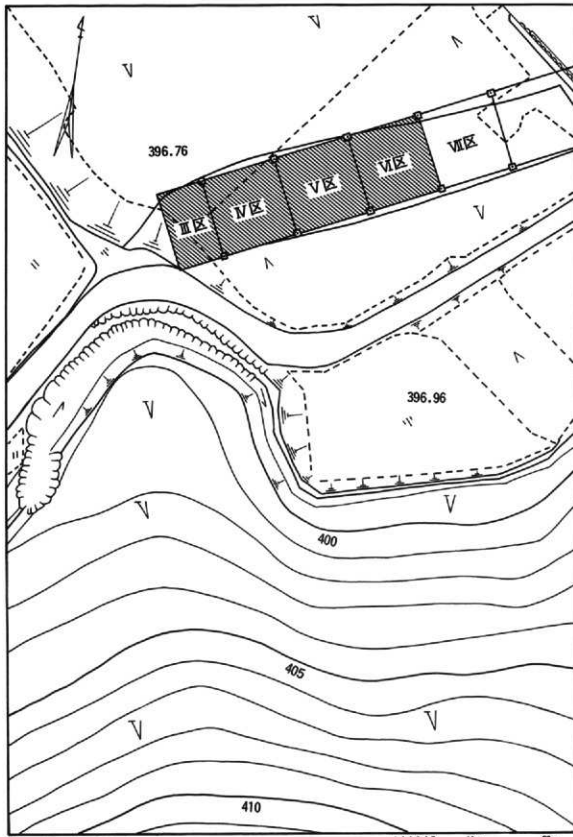
Ⅲ区の斜面は，遺物が密集する地点であり，手掘りによる掘り下げ作業と遺物出土点実測図作成を平行しながら進めた。斜面の遺物包含層は，基本的に６枚に分けられていることもあり10日間を要した。ちなみに今回の調査範囲から出土した遺物の90%を占める。

斜面の調査を終了後，Ⅲ・Ⅳ区の平地面に着手する。平地は，Ⅲ層～Ⅴ層を有し，さらに南から北西に傾斜する地形を呈すことから，地形に沿って精査を進めた。Ⅲ区は土壙１基と溝状遺構１基，Ⅳ区に土壙１基を確認した。Ⅳ区のⅢ層面遺構掘り下げ終了後，Ⅲ区とⅣ区の中間とⅤ区～Ⅳ区の南側に幅１メートルのトレンチを配し，再度，層位の確認を実施する。

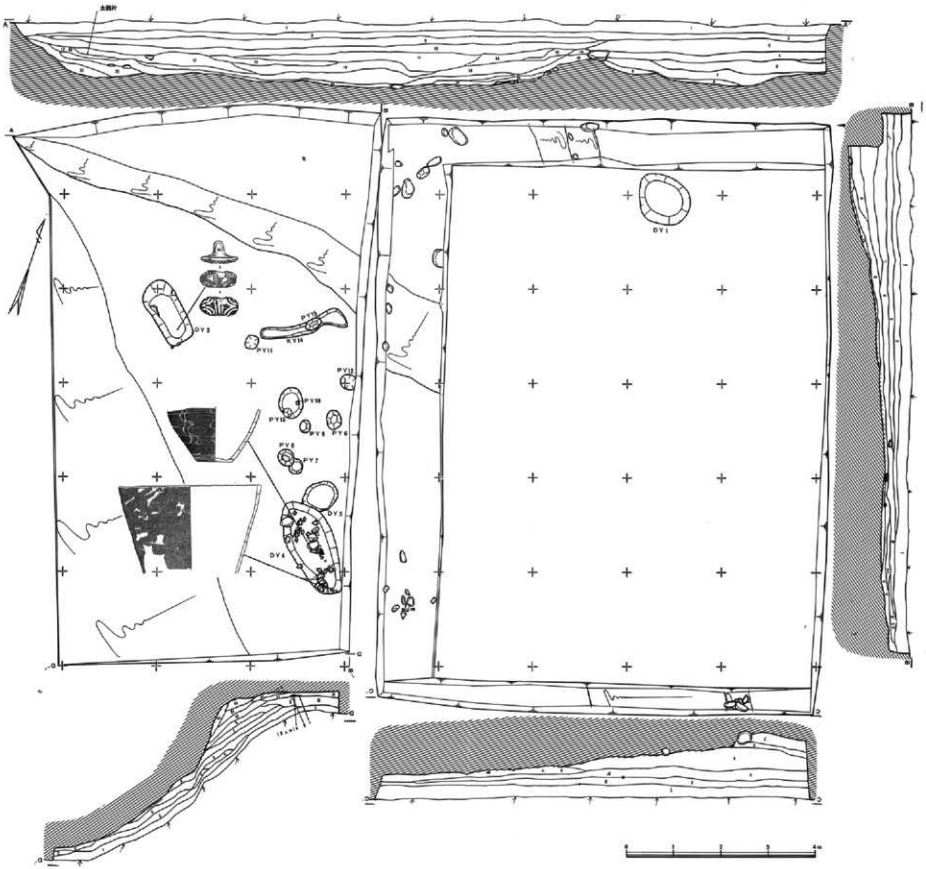
Ⅴ～Ⅶはすでに，遺構が存在しないことが判明しており，さらにⅣ区Ⅲ層下面も含まれることから，Ⅲ区の平地Ⅳ層，Ⅴ層を残すだけとなった。Ⅲ層面の遺構掘り下げ終了後は，Ⅳ層に確認された。配石遺構の精査に着手する。本遺構は，６月５日に行なわれる現地説明会を考慮して残すことにする。

現地説明会，終了後に礫の取り上げ作業を行ない，さらに精査した結果，２基の土壙を始め，ピット群を確認した。６月６日までに，すべての調査を完了する。

今回の調査は，調査対象面積560㎡，調査面積460㎡，精査面積360㎡であった。調査期間は５月６日～６月６日の延べ30日間を要した。



第２図　左沢遺跡グリット配図



第３図　左沢遺跡遺構平面図

3．層序〔第3図〕

左沢遺跡の層序は段丘斜面と段丘下の平地とに分けられる。斜面の基本的な層位は第Ⅰ層～第Ⅵ層の6枚に大別され，さらに間層となる微砂質層が加わり15層から成る。基本層のⅢ層（明茶褐色微砂質層3・4）Ⅳ層（明黒褐色微砂質土層5）Ⅴ層（暗黒褐色微砂質層6・7・8）は遺物包含層である。地山は，明黄褐色シルト層で全体的に固くしまっている。

平地は基本的に第Ⅲ層～第Ⅴ層の3枚に大別される。第Ⅲ層は明灰褐色微砂質層（9），第Ⅳ層は暗赤灰褐色微砂質層で小量の木炭を含む（1）。第Ⅴ層は暗黄褐色シルトとなる（13）。

南から北に傾斜する範囲は（10～23）砂礫層で覆われ，旧左沢川の河原跡である。Ⅳ区とし，Ⅲ区の中央部から，Ⅴ区，Ⅵ区にかけては，Ⅲ区とした地域より，新しい砂礫層が厚く堆積しており，左沢川が次第に現在の北東方向に変化していった様子がわかる。

4．遺構の概要

層位で述べた様に，段丘下の平地は旧左沢川によって形成された小規模な河岸段丘であり，今回の調査でⅢ区とした範囲である。遺構もこの地区に集中しており，基本層のⅢ層～Ⅴ層面（Ⅲ層面は加曽利Ｂ2式，Ⅳ，Ⅴ層面は加曽利Ｂ3式が主体をなす）より確認され，満状遺構2基，土壙4基，ピット群9基，配石遺構2基の計17基であった。次に，遺構群の詳細について述べる。

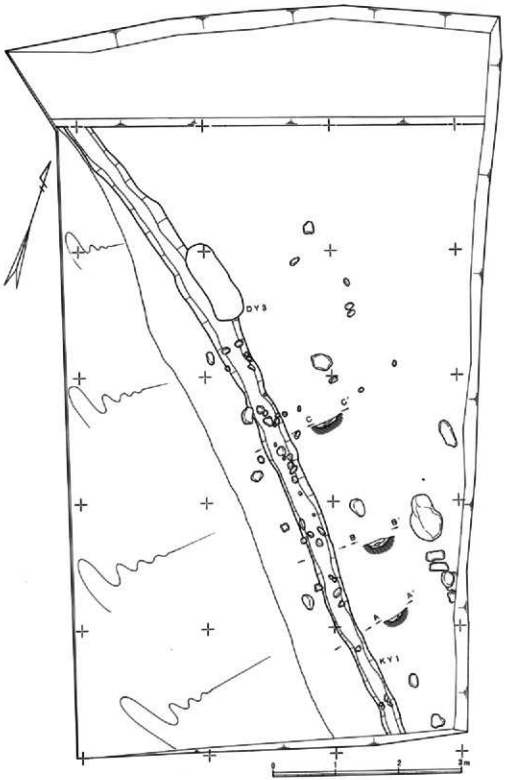
土壙〔第5図ＤＹ1，第5図ＤＹ3，第6図ＤＹ4・5，第1・2図版〕

第Ⅲ層面から掘り込れたＤＹ1，ＤＹ3，第Ⅴ層から掘り込まれたＤＹ4，ＤＹ5の4基がありＤＹ1を除き縄文後期中葉に位置付けられる。Ⅳ区のＤＹ1は，楕円形状を有し長径122cm，短径101cm，深さは18cmと浅く，断面形態はボール状を呈す。覆土は2枚であり，No 1は茶褐色微砂質で焼土を多量に含む。No 2は黒褐色で多量の木炭を含む。土質はNo 1・2共やわらかい。焼性を目的として構築されたことは言うまでもないが，性格，年代については不明である。

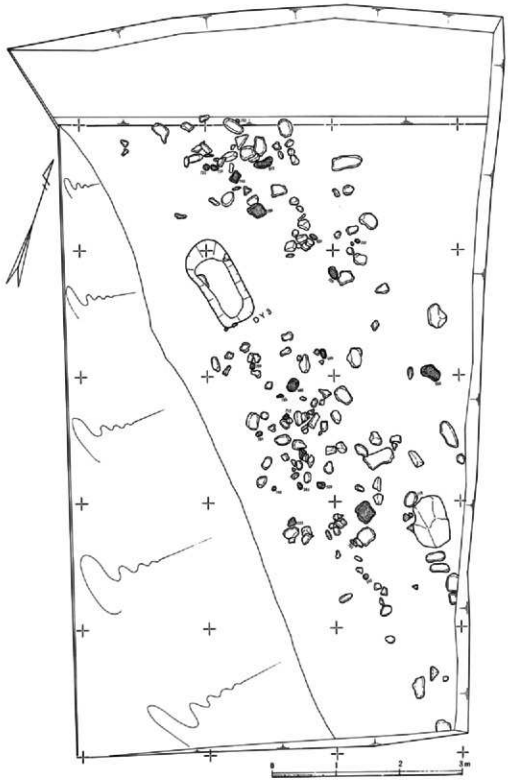
ＤＹ3はⅢ区北西の段丘直下に位置し，ＫＹ2と重複している。第Ⅲ層面から地山まで掘り込まれている。平面形状は，隅丸の長方形を呈し，長径122cm，短径101cm，深さ42cmを計る。底面は平坦でやや南から北に傾斜し，壁は直角的に弱く立ち上がる。覆土は9枚に分れ，No 1・2は暗赤褐色微砂質で地山の土砂を若干含む。No 3～No 5は明灰褐色微砂質層が主体をなす。No 5にこぶし大の自然礫を含む。No 6・7はNo 1・2の明赤褐色微砂質層に類似する。No 8・9は黄灰褐色砂礫層で地山の土が多量に混入している。土質は，No 1・2・8・9は若干かたくしまっている。No 3～No 5は若干やわらかい。

出土遺物としては，覆土のNo 3南東部より本遺跡出土土器群ｎ類に分類した完形のスタンプ形土製品が検出された。ＤＹ3は覆土状況や出土遺物から，墓壙の可能性が考えられる。

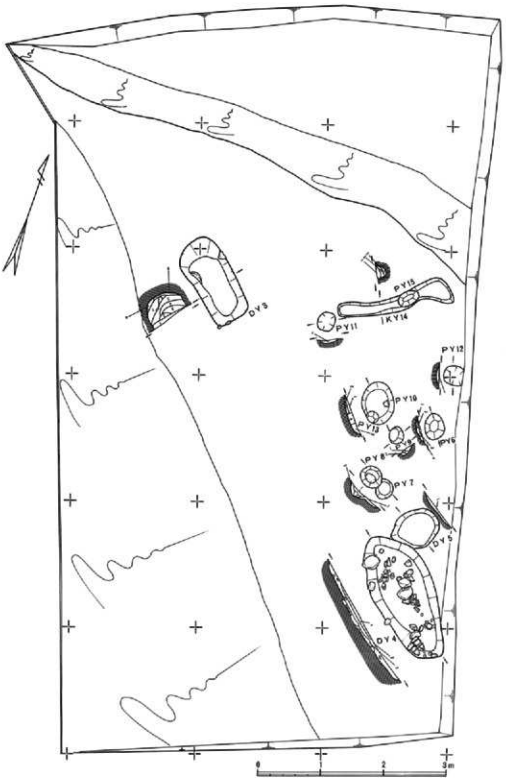
ＤＹ4・ＤＹ5は重複して，Ⅲ区の南東部に位置する。長円形，円形を有し，ＤＹ4の長径は218cm，短径は98cm，ＤＹ5は長径80cm，短径62cmを有し，深さは12cm～6cmと浅く，断面形態は



第4図　左沢遺跡第Ⅲ層面遺構平面図



第5図　左沢遺跡第Ⅳ層面遺構平面図



第6図　左沢遺跡第Ⅴ層面遺構平面図

ボール状を呈す。覆土は1枚～3枚に分れ，暗黄灰褐色砂質層が中心をなし，やわらかくサラサラしている。DY5は遺物を含まない。DY4はNo2，No3の覆土に小量の土器b類，m類の他にⅦ群土器，磨石3点が検出された。さらにDY4の覆土には炭焼土を多量に含み，床面から壁にかけて焼土が認められた。また床面からは深鉢形土器の下半第20図が礫に押し潰された状態で中央部位に検出され，南壁面に沿ってm類の第18図も認められた。性格としては，焼性用として構築された後に，ゴミ捨て場として再利用された土壙と考えたい。なおDY5の上面には大形の礫があり，意図的な意味を有するのかも知れない。

溝状遺構〔第4図KY2，第6図KY14，第1・第2図版〕

KY2は，Ⅲ区第Ⅲ層面，段丘直下に位置する。段丘下線に沿って，南北に延びる溝状遺構であり，南側の全容は明確にできなかった。北側は傾斜地内で不規則に拡大して，旧左沢川に流れていたと思われる。

形態は，不規則な幅を有し，最大幅は北方の傾斜する位置に求められ50cm，最小幅は27cm，17cm～3cmと浅い。底面はボール状を有し，壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は3枚ありNo1は暗黒褐色微砂質層，No2は暗茶褐色微砂質層，No3は黄灰褐色砂質層である。No3はKY2にだけ認められる土砂であり，水が流れている時期に運搬された堆積物である。

出土遺物としては，a類～n類に分類した土器群の他に，Ⅶ群K類の石器，磨石がある。

KY14はV層面に東西に延びる小規模な溝状遺構である。長さは85cm，最大幅38cm，深さ9cmと浅い。覆土は3枚あり暗黄灰褐色砂質層が主体をなす。遺物は含まない。

溝状遺構の性格については，KY2に関して人工の構築によるものか，自然遺構なのかは不明である。KY14はV層面のピット群と係わりを持ったものと思われる。

ピット群〔第6図PY6～13・PY15，第2図版〕

平面形状が円形，楕円形を有し，長径67cm～20cm，短径50cm～18cm，深さ12cm～6cmと浅いのが特徴である。覆土は1枚～3枚に分れ，暗灰褐色が主体をなす。遺物はほとんど含まない。

これらの遺構群はⅢ区東側中央部に集中しているが，関連性は見い出せなかった。

配石遺構〔第5図CY17・第2図版〕

CY17はⅢ区の南北約10cm，東西約5cmを範囲として，分布する。円形状や長円形の河原石(10cm～30cmの大きさで安山岩，玄武岩が主体をなす）を使用し構築された配石遺構である。堀り方は認められず，地面に置いただけである。第5図に[redacted]で示した礫が磨石で22点を数える。DY3と関連する祭祀遺構と考えたい。ちなみに左沢川の河床面には安山岩・玄武岩は含まない。

Ⅳ区北トレンチ〔第3図参照〕の旧左沢川岸部に構築された遺構である。大形の河原石を川岸斜面に沿って配した形態を有す。この遺構の底面からa～f類の土器片が出土しており，左沢川が平地遺構群の直下を流れていたことを示す。

5．遺物の概要

左沢遺跡からは，Ⅲ区と称した段上下の平地，段丘斜面の基本層Ⅲ層～Ⅵ層より集中して総数903点の遺物が出土した。土器片は759点，石器96点，礫38点となり，土器片はａ類～ｎ類の14形態，石器はⅠ群～Ⅱ群の６形態，礫はＣ～Ｆの４形態にそれぞれ分類し，必要に応じて細分を加えた。以下石器，礫，土器の順で細部についての説明に入る。

6．石器〔第７図～第９図〕

出土した石器の中で，図面を必要と認識された石器46点，礫器38点について実測図を作図，さらに第２表に形態分類表，第３表に石器計測表，礫器については，第５表に形態分類表，第４表に礫計測表を作成したので，詳細についてはこれらの表を参照願いたい。

形態別に出土した石器を列挙すると，Ⅰ群石器（石鏃）１点，Ⅱ群石器（尖頭器）２点，Ⅲ群石器（石錐）３点，Ⅵ群石器（石篦）２点，Ⅶ群石器（スクレーパー類）30点，Ⅺ群石器（石核）５点となる。これ以外には，接合石器３点がある。なお同一母岩剥片使用石器については第３表に示した。礫はＣ（凹石）４点，Ｄ（磨石）25点，Ｅ（石皿）７点，Ｆ（敲石）２点となる。

Ⅰ群石器〔第７図１〕

Ⅲ区Ⅳ層面より１点出土している。両端部が尖状を有する形状を呈し，両面調整によって整形された棒状の石鏃であり，Ⅰ群ｇ類に細別した。ｇ類の形状を持つ石鏃は，縄文後期～晩期に多く出土する形態であり，本遺跡においても一致する。

Ⅱ群石器〔第７図２（ｂ類），３（ａ類）〕

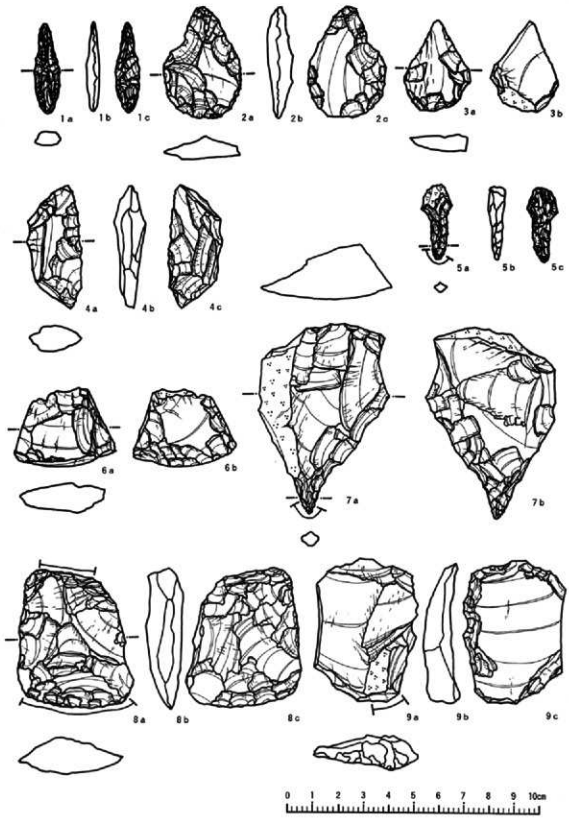
Ⅲ区Ⅲ層とⅤ層より２点出土した。剥離調整からａ類，ｂ類に細別した。両者とも縄文の各時代に不変的に認められる形態である。ａ類とした２は基部に自然面を残し，整形は簡単である。

Ⅲ群石器〔第７図４（b^2類）５（ｄ類）７（c^2類）〕

Ⅲ区Ⅲ層～Ⅴ層より３点出土している。尖状部の整形より３形態に細別した。４は両面調整で整形され，両端に尖状部を有する石器である。尖状部に使用痕は観察されず錐（ドリル）的機態として使用された石器ではない。５はつまみ部と錐部から構成された小形の石錐であり尖端部に使用痕を有す。尖状部はねじれた形に両面から調整され，錐部断面は菱形を呈す。７は横形の大形剥片を素材として，作業縁辺となる尖状部だけを両面調整によって整形を加えた形状を持つ。

Ⅵ群石器〔第７図８（j^2類）９（k^2類）〕

Ⅲ区Ⅳ・Ⅴ層より２点出土。８は両面調整によって整形された石篦状石器である。基部は平坦であり，刃部はゆるやかに外湾を呈す。j^1類とは基部の整形で異なる。j^2類の縦断面図は基部が厚味であるのに対して，j^1類とした石器群は，平面形状はj^2類と同様であるが基部は薄形に整形されている点がj^1類の特徴である。このj^1類は，桑山遺跡群No５遺跡に代表される縄文早期末葉に多く認められる形態である。



第7図　左沢遺跡出土石器実測図(1)

刃部と基部に使用痕が観察できる。基部は柄着痕と理解され，機能としては，カッティング的な用途を持つ石器と理解したい。柄着装例として，江別太遺跡の石器に類似するものである。

9は縦形剥片を素材とし，バルブ除去を加え9c面に主要剥離面を有す。作業縁辺となる刃部は直角に整形された石器であり，基部と刃部を結ぶ片方の縁辺が直線的なのが特徴である。エンドスクレーパー的機能を有す。

Ⅶ群石器〔第7図6（f^3類）第8図1・2・7・13・19・23・27・26（j^1類）5・6・8・9・10・14・18（j^2類）11・12・13・4・15・16（j^3類）17・20・21・22・25（k^1類）24（k^2類）28・29（k^3類）〕

Ⅶ群石器は，f^3類は台形状石器，j^1～j^3類は縦形剥片を素材とした石器群，k^1～k^3類は横型剥片を素材とした石器群であり，主に素材となる剥片の形状より細分を加えた。この石器群は縁辺より簡単な調整を加えただけの石器群であり，素材となる剥片は原形を保つものが多く，中には二次調整を加えていない石器もある。いづれも使用痕は観察されず，未使用の石器群だ。

Ⅺ群石器〔第9図5（b^1類）1～4（b^2類）〕

b^1類とした5は，a面は自然面で覆われる。b面を打面として周辺の縁辺から剥離作業を加えた大形の石核残痕である。1～5も自然面を有し，母岩となる石核は無調整の段階で剥離作業を加えていることがわかる。剥離は自然面の陵線または縁辺を利用している。

これ以外の石器としては第9図6～8の接合石器がある。6の同一母岩としては実測図を作成した剥片も含めて13点，7は20点，8は6点出土しているが，接合したのは実測図の示した剥片類だけである。6～8はいづれも異なる母岩から剥離された剥片である。

7．礫器〔第10図～第12図〕

礫は，第Ⅳ層面の配石遺構を中心に検出された。形態的には円形を有し，断面形態が楕円形を呈する形状で，磨面形態が両面（ⅠA＋D2）のものが多い。石材としては，安山岩が最も多く使用され，次に石英粗面がある。

凹石〔第11図12・14～16〕

平面形状は，長円形を呈し（ⅠB），凹を複数（C^n）有する形態であり，断面が台形状（ⅡC）である。これらの中でも12は，特に注意され，いわゆる蜂の巣状の凹部（C^H）を有す。

磨石〔第10図1～16・第11図1～7・9・10〕

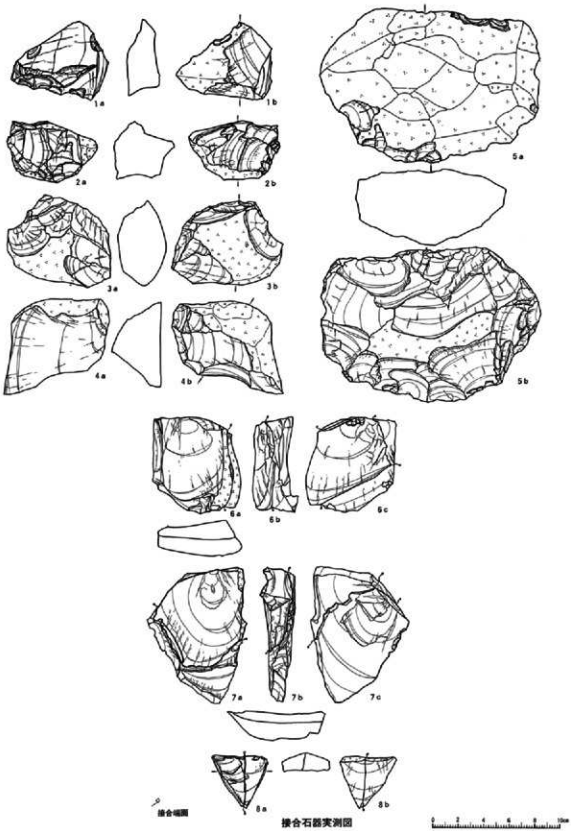
円形状（ⅠA）や楕円形状（ⅠB）の平面形状を有し，断面は楕円形や（ⅠA），台形状（ⅡC）が主体をなす。磨石は2面（D^B）が主体をなす。磨石は礫器の中では最も出土数が多い。

石皿〔第12図～1～6〕

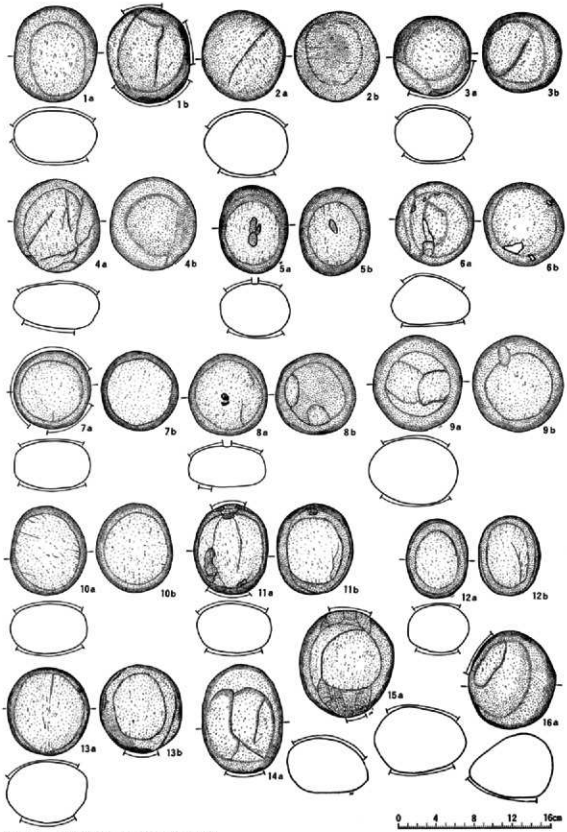
偏平で大形の河原石を素材として，作業面と縁辺の区別が明瞭でない（2E）の形態である。

敲石〔第11図8・11〕

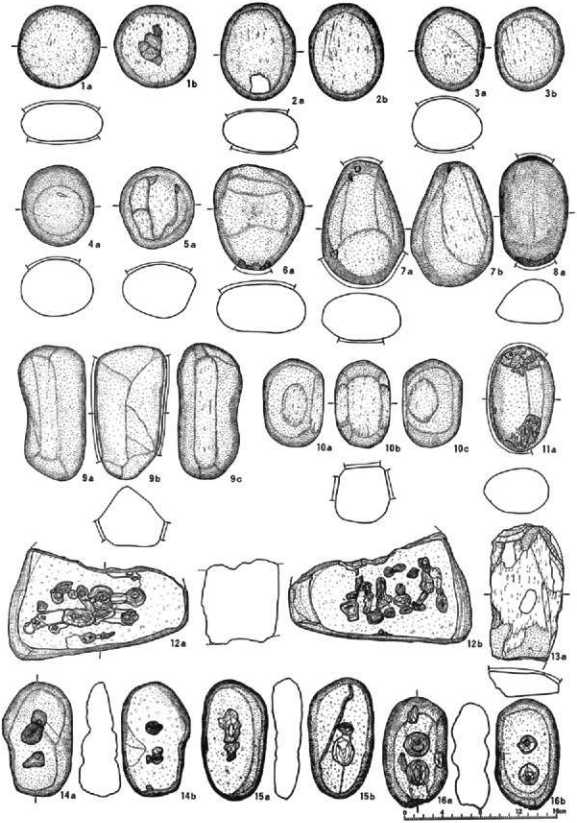
第8図　左沢遺跡出土石器実測図(2)



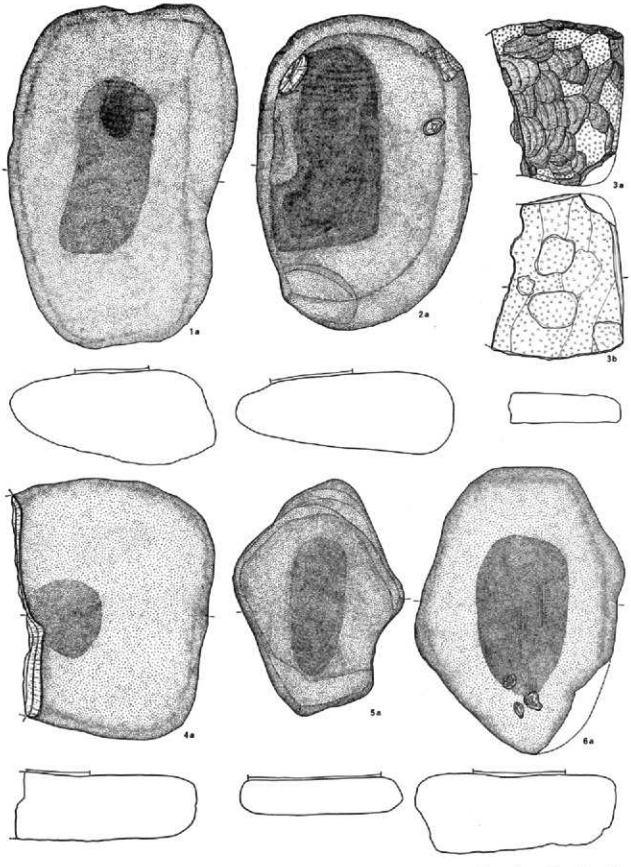
第9図　左沢遺跡出土石器実測図(3)



第10図　左沢遺跡出土縄器実測図(1)

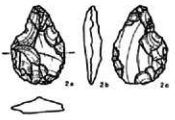
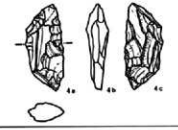
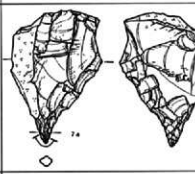


第11図　左沢遺跡出土礫器実測図(2)



第12図　左沢遺跡出土礫器実測図(3)

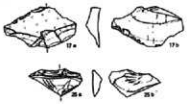
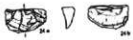
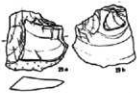
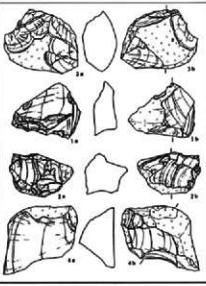
第２表　左沢遺跡出土石器形態分類表〔Ⅰ群g類～Ⅱ群a・b・b^2類，Ⅲ群b^2・c・d類〕

		形態	特徴	計測	平均	挿図	番号	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層
Ⅰ群	g類		Ⅲ群d類と基本的に類似する形状を有するが、尖状部に使用痕が確認されないことからⅠ群石器にした。	長さ(㎝) 幅 (㎝) 厚さ(㎝) 重さ(g)	3.6 1.0 0.6 0.7	第7	図1		1点	
Ⅱ群	a類		素材に三角形状の小剥片を選定し縁辺に最小限の調整を加えただけの石器群を本類とした。 尖状部は無調整の形態を有するのが特徴である。	長さ(㎝) 幅 (㎝) 厚さ(㎝) 重さ(g)	3.6 2.7 0.8 6.0	第7	図3	1点		
	b類		平面形状は、a類と類似するが剥離形が異なる点から区別した。 素材も同質の剥片を使用している	長さ(㎝) 幅 (㎝) 厚さ(㎝) 重さ(g)	4.4 3.0 1.0 1.0	第7	図2			1点
Ⅲ群	b^2類		b類は中央部に両尖端が位置しているのに対し、b^2類の両尖端部は中央よりずれて整形しているのが特徴である。	長さ(㎝) 幅 (㎝) 厚さ(㎝) 重さ(g)	4.9 2.2 1.3 9.1	第7	図4		1点	
	c^1類		大形の剥片を素材に用い、両面調整によって、尖状部が整形されている。 尖端部の断面が菱形と三角形の2者を有す。	長さ(㎝) 幅 (㎝) 厚さ(㎝) 重さ(g)	7.7 5.2 2.3 71.9	第7	図7	1点		
	d類		小形の形状を有し、尖状部とつまみから形成されている。尖状部断面は菱形を呈す。	長さ(㎝) 幅 (㎝) 厚さ(㎝) 重さ(g)	3.0 1.2 0.7 1.9	第7	図5			1点

〔Ⅵ群j²・k²類，Ⅶ群f³・j¹・j²類〕

		形態	特徴	計測	平均	掲図	番号	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期
Ⅵ群	j² 類	8a 8b 8c	基部が平坦であることからj類とした。 j²類とは刃部形態で異なり、刃部両縁辺がゆるやかにカーブをなす。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g) 刃角(度)	5.5 4.6 1.5 4.0 4.2	第7	図8		1点	
	k² 類	9a 9b 9c	縁辺が切断面や自然面によって直線的な形状を呈するのが特徴である。 k²類とは、作業縁辺及び形状から区別した。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g) 刃角(度)	5.9 4.1 1.5 3.5 9.0	第7	図9			1点
Ⅶ群	f³ 類	6a 6b	基本的に自形状を有する石器群を本類とした。 これらの中でも切断面をもつグループである。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	3.1 5.0 1.2 1.5	第7	図6			1点
	j¹ 類	1a 1b 2a 2b 7a 7b	j類は、縦形剥片を素材としている。剥離整形は簡単な縁辺調整を主体としており、素材となる剥片は原形を保つものが多い。 このグループは素材となる剥片形態より次のj類～j類に細分した。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	6.8 4.4 1.3 43.7	第8 第8 第8 第8 第8 第8 第8 第8	図1 図2 図7 図13 図19 図23 図27 図26	1点	2点	5点
	j² 類	4a 4b 10a 10b	j類は、両端部が平坦な長方形状を呈すのが特徴である。 j類は、尖状部を有する形態であり、基部もやや丸味を持ち、基部から尖状部に至る縁辺もゆるやかなカ	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	5.4 4.0 1.1 19.8	第8 第8 第8 第8 第8 第8 第8	図5 図6 図8 図9 図10 図14 図18	5点	2点	

〔Ⅷ群 j^3 類，k^1～k^3 類，Ⅸ群 b 類〕

		形　　態	特　　徴	計　測	平　均	挿図	番号	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層
Ⅷ群	j^3 類		ープをえがく。 尖状部を有する点では j^3 類と類似しているが、尖状部が縁辺端部に位置していることから j^3 類とした。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	6.6 4.6 1.6 44.1	第8 第8 第8 第8 第8 第8	図11 図12 図 3 図 4 図15 図16	2点	2点	2点
	k^1 類		横形剥片を素材としていることから本類とした。 さらに、剥片素材の形態から k^1～k^3 に細別を加える。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	6.0 6.3 1.5 4.3	第8 第8 第8 第8 第8	図17 図20 図21 図22 図25		1点 KY2 1点	3点
	k^2 類		本類も j 類と同様な剥離調整を呈するグループである。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	3.6 6.4 1.4 23.6	第8	図24			1点
	k^3 類		k^1 は両端部が尖状を呈する。 k^2 は基部が平坦で両端部が丸味をおびている。 k^3 は、方形状を呈す。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	6.0 6.3 1.5 4.3	第8 第8	図28 図29		1点	1点
Ⅺ群	b^2 類		本群は、石核および石核残痕のグループである。 いづれも打面を整形することなく母岩の自然面から剥離作業を加えている。 b^2 類とした第9図5は形状から他の石核群と区別した。	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	7.9 5.9 3.8 137.2	b^1 類 第9 b^2 類 第9 第9 第9 第9	図5 図1 図2 図3 図4	b^1 類 1点	b^2 類 2点	b^2 類 2点

第3表　左沢遺跡出土石器計測表

Ⅰ 群 石 器

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形　態	剥離調整	備　考
1	BZ10	第7図 1	Ⅲ区	Ⅳ層	3.6	1.0	0.6	0.7	頁岩	Ⅰ群 g 類	Ⅰ・Ⅱab＋$R^{4\sim5}$	

Ⅱ 群 石 器

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形　態	剥離調整	備　考
2	196	第7図 3	Ⅲ区	Ⅲ層	3.6	2.7	0.8	6.0	頁岩	Ⅱ群 a 類	Ⅰ～Ⅲb＋$R^{7\cdot8}$	
3	BZ25	第7図 2	Ⅲ区	Ⅴ層	4.4	3.0	1.0	10	頁岩	Ⅱ群 b 類	Ⅰ～Ⅲab＋$R^{2\sim9}$	横型剥片使用

Ⅲ 群 石 器

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形　態	剥離調整	備　考
4	BZ 3	第7図 4	Ⅲ区	Ⅳ層	4.9	2.2	1.3	9.1	頁岩	Ⅲ群 b^2類	Ⅰ・Ⅱab＋$R^{5\cdot9}$	
5	BZ 4	第7図 7	Ⅲ区	Ⅳ層	7.7	5.2	2.3	71.9	頁岩	Ⅲ群 c^1類	Ⅰ・Ⅱab＋$R^{7\sim9}$ Ⅳ＋R^9	尖端部使用痕有り
6	BZ21	第7図 5	Ⅲ区	Ⅴ層	3.0	1.2	0.7	1.9	頁岩	Ⅲ群 d 類	Ⅰ・Ⅱab＋$R^{4\cdot5}$	尖端部使用痕有り

Ⅳ 群 石 器

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形　態	剥離調整	備　考
7	BZ25	第7図 8	Ⅲ区	Ⅳ層	5.5	4.6	1.5	40	頁岩	Ⅷ群 j^2類	Ⅰ～Ⅳab＋$R^{7\sim9}$	節理面有り 使用痕有り
8	205	第7図 9	Ⅲ区	Ⅴ層	5.9	4.1	1.5	35	頁岩	Ⅷ群 k^2類	Ⅱ～Ⅳa＋$R^{5\cdot9}$・Ⅰ Ⅲ・Ⅳab＋$R^{7\cdot8}$	使用痕有り

Ⅷ 群 石 器

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形　態	剥離調整	備　考
9	756	第8図 6	Ⅲ区	Ⅴ層	3.1	5.0	1.2	15	頁岩	Ⅷ群 f^3 類	Ⅰ～Ⅳa Ⅱ～Ⅳb＋$R^{7\sim9}$	
10	BZ 8	第8図 1	Ⅲ区	Ⅴ層	9.9	4.9	1.9	78	頁岩	Ⅷ群 j^1 類	Ⅰ～Ⅱa＋$R^{7\sim9}$ Ⅲ・Ⅳb＋$R^{7\sim9}$	
11	690	第8図 2	Ⅲ区	Ⅴ層	8.4	4.2	1.1	41	頁岩	Ⅷ群 j^1 類		二次調整なし
12	912	第8図 7	Ⅲ区	Ⅳ層	8.7	6.1	1.4	62	頁岩	Ⅷ群 j^1 類	Ⅰ・Ⅳb＋$R^{8\cdot9}$	
13	12	第8図13	Ⅴ区	Ⅴ層	7.2	5.1	1.7	43	頁岩	Ⅷ群 j^1 類	Ⅰ・Ⅲb＋$R^{7\cdot8}$	
14	182	第8図19	Ⅲ区	Ⅲ層	4.0	4.0	1.2	20	頁岩	Ⅷ群 j^1 類	Ⅲa＋R^7 Ⅳb＋R^8	
15	769	第8図23	Ⅲ区	Ⅴ層	4.9	5.1	1.0	23	頁岩	Ⅷ群 j^1 類		二次調整なし
16	144	第8図27	Ⅲ区	Ⅳ層	6.7	6.3	1.1	36	頁岩	Ⅷ群 j^1 類		二次調整なし
17	754	第8図26	Ⅲ区	Ⅴ層	(4.9)	6.3	1.1	47	頁岩	Ⅷ群 j^1 類		欠損面有り
18	242	第8図 5	Ⅲ区	Ⅳ層	6.8	3.2	1.0	17	頁岩	Ⅷ群 j^2 類	Ⅰ・Ⅱa・Ⅰb＋$R^{7\sim9}$	
19	687	第8図 6	Ⅲ区	Ⅴ層	7.7	4.3	1.5	35	頁岩	Ⅷ群 j^2 類	Ⅱa・Ⅱ Ⅳb＋$R^{7\sim9}$	
20	918	第8図 8	Ⅲ区	Ⅳ層	4.4	2.8	0.8	12	頁岩	Ⅷ群 j^2 類	Ⅱ・Ⅲa Ⅰb＋R^2	
21	303	第8図 9	Ⅲ区	Ⅳ層	4.0	3.3	1.0	11	頁岩	Ⅷ群 j^2 類	Ⅱ・Ⅳa＋$R^{7\sim9}$ Ⅰ・Ⅳb＋$R^{8\cdot9}$	
22	159	第8図10	Ⅲ区	Ⅳ層	3.4	3.5	1.0	9	頁岩	Ⅷ群 j^2 類		二次調整なし

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形態	剥離調整	備考
23	693	第8図14	Ⅲ層	Ⅴ層	5.2	4.9	1.0	20	頁岩	Ⅷ群 j^2類	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳb+R^8	
24	478	第8図18	Ⅲ層	Ⅳ層	6.8	6.1	1.4	35	頁岩	Ⅷ群 j^2類	Ⅳb+$R^{8\cdot9}$ Ⅲb+R^8	
25	169	第8図11	Ⅲ層	Ⅲ層	6.6	3.9	1.0	25	頁岩	Ⅷ群 j^3類	Ⅰ・Ⅱb+R^9	
26	338	第8図12	Ⅳ層	Ⅳ層	7.6	5.4	1.4	65	頁岩	Ⅷ群 j^3類	Ⅱa・Ⅰ〜Ⅲb+$R^{7〜9}$	
27	913	第8図 3	Ⅲ層	Ⅴ層	7.8	5.5	2.5	68	頁岩	Ⅷ群 j^3類	Ⅱb+R^9	
28	155	第8図 4	Ⅲ層	Ⅲ層	4.7	3.7	1.6	12	頁岩	Ⅷ群 j^3類		二次調整なし
29	281	第8図15	Ⅲ層	Ⅲ層	7.9	6.0	1.6	70	頁岩	Ⅷ群 j^3類	Ⅲa・Ⅰb+$R^{7\cdot8}$ Ⅲb+R^9	二次調整なし
30	677	第8図16	Ⅲ層	Ⅴ層	5.2	3.6	1.6	25	頁岩	Ⅷ群 j^3類	Ⅳb+R^9	二次調整なし
31	635	第8図 7	Ⅲ層	Ⅴ層	4.6	8.1	1.6	40	頁岩	Ⅷ群 k^1類		
32	517	第8図20	KY2		4.0	7.5	1.9	26	頁岩	Ⅷ群 k^1類	Ⅳa・Ⅰ〜Ⅲb+$R^{7\cdot8}$	
33	852	第8図21	Ⅲ層	Ⅴ層	3.6	5.9	1.7	30	頁岩	Ⅷ群 k^1類	Ⅳb+R^9	二次調整なし
34	813	第8図22	Ⅲ層	Ⅴ層	2.9	4.9	0.7	8	頁岩	Ⅷ群 k^1類	Ⅳb+$R^{8\cdot9}$	
35	920	第8図25	Ⅲ層	Ⅳ層	3.1	5.9	1.1	14	頁岩	Ⅷ群 k^1類	Ⅰa・Ⅲb+R^8 Ⅰ・Ⅱb+$R^{8\cdot9}$	
36	614	第8図24	Ⅲ層	Ⅴ層	2.7	4.6	1.6	15	頁岩	Ⅷ群 k^2類	Ⅳb+$R^{8\cdot9}$	
37	919	第8図28	Ⅲ層	Ⅳ層	5.0	5.6	1.5	28	頁岩	Ⅷ群 k^3類		
38	429	第8図29	Ⅲ層	Ⅴ層	7.0	7.1	1.6	63	頁岩	Ⅷ群 k^3類		

Ⅺ 群 石 器

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形態	剥離調整	備考
39	225	第9図 5	Ⅳ層	Ⅲ層	17.5	12.1	6.1	1,420	頁岩	Ⅺ群 b^1類		
40	917	第9図 1	Ⅲ層	Ⅴ層	8.1	6.0	4.3	99	頁岩	Ⅺ群 b^2類		
41	316	第9図 2	Ⅲ層	Ⅴ層	8.8	6.8	3.7	220	頁岩	Ⅺ群 b^2類		
42	638	第9図 3	Ⅲ層	Ⅴ層	7.2	4.7	4.8	176	頁岩	Ⅺ群 b^2類		
43	911	第9図 4	Ⅲ層	Ⅳ層	7.6	6.1	2.7	60	頁岩	Ⅺ群 b^2類		

接 合 石 器

通し No.	遺物 No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形態	剥離調整	備考
44	915	第9図 6	Ⅲ層	Ⅲ層	6.8	6.7	1.3	20	頁岩	Ⅷ群 j^1類		a面下
	916	第9図 6	Ⅲ層	Ⅲ層	7.6	6.6	1.7	25	頁岩	Ⅷ群 j^1類		a面上
45	113	第9図 7	Ⅲ層	Ⅳ層	7.6	7.6	2.4	18	頁岩	Ⅷ群 j^1類		a面上
	914	第9図 7	Ⅲ層	Ⅳ層	10.6	8.2	1.2	23	頁岩	Ⅷ群 j^2類		a面下
46	128	第9図 8	Ⅲ層	Ⅲ層	4.3	2.7	1.6	15	頁岩	Ⅷ群 j^2類		a面左
	334	第9図 8	Ⅳ層	Ⅳ層	4.2	2.0	1.3	13	頁岩	Ⅷ群 j^2類		a面右

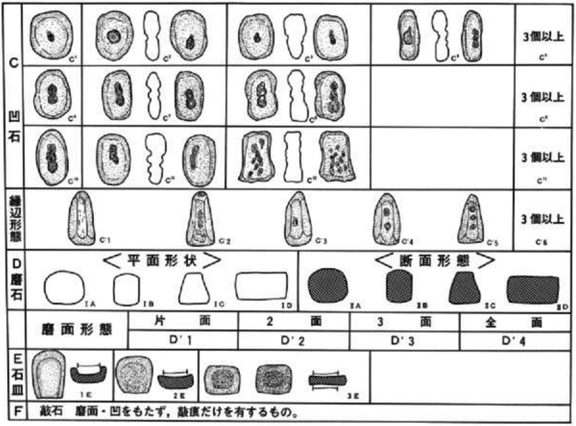
◇接合した 916、 915 と同じ母岩より剥離された剥片を素材とした石器

遺物No.	挿図番号	遺物No.	挿図番号	遺物No.	挿図番号	遺物No.	挿図番号	遺物No.	挿図番号
693	第8図14	155	第(2)図4	635	第(2)図17	769	第(2)図23	916	第(3)図6
159	第8図10	517	第(2)図20	614	第(2)図24			915	第(3)図6

第4表　左沢遺跡出土礫器計測表

通しNo	遺物No	挿図番号	出土地区	形態	断面	細分	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
1	762	第11図15	Ⅲ区Ⅴ層	C	Ⅱ C	Ⅰ B+C^{5}	12.8	6.9	3.1	380	石英粗面岩
2	893	第11図14	Ⅲ区Ⅳ層	C	Ⅱ C	Ⅰ B+C^{6}	12.0	7.3	4.3	340	石英粗面岩
3	854	第11図16	Ⅲ区Ⅴ層	C	Ⅱ C	Ⅰ B+C^{9}	(11.6)	6.8	4.2	340	凝灰岩
4	899	第11図12	Ⅲ区Ⅳ層	C	Ⅱ C	Ⅰ B+C^{12}	18.8	11.8	8.0	945	石英粗面岩
5	784	第10図2	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ A	Ⅰ A+D′2	9.6	8.8	6.8	780	安山岩
6	892	第10図16	Ⅲ区Ⅳ層	D	Ⅱ A	Ⅰ A+D′2+C′2	10.3	9.0	6.8	480	安山岩
7	902	第11図4	DY4	り	Ⅱ A	Ⅰ B+D′2	8.6	7.5	6.1	560	安山岩
8	709	第10図12	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ A	Ⅰ B+D′2	8.5	6.5	5.1	520	安山岩
9	891	第10図5	Ⅲ区西トレンチ	D	Ⅱ A	Ⅰ B+D′2	9.3	7.3	5.6	580	安山岩
10	897	第11図10	Ⅲ区Ⅲ層	D	Ⅱ A	Ⅰ B+D′3	9.2	6.2	5.7	520	安山岩
11	898	第11図9	Ⅲ区Ⅳ層	D	Ⅱ B	Ⅰ B+D′2	14.2	7.6	6.3	990	安山岩
12	712	第11図5	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′1	8.6	7.8	5.7	480	安山岩
13	890	第11図6	Ⅲ区Ⅳ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′1+C′2	11.2	9.3	5.2	580	安山岩
14	737	第11図3	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′2	8.4	8.2	5.6	560	安山岩
15	505	第10図1	KY2−B	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′2	10.1	8.8	5.5	750	安山岩
16	842	第10図4	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2	9.9	9.1	4.7	600	石英粗面岩
17	552	第10図11	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′2	9.5	7.9	5.2	600	安山岩
18	734	第10図13	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′2	9.4	8.6	6.5	740	安山岩
19	230	第10図7	Ⅲ区Ⅲ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′2	8.2	8.2	5.0	500	安山岩
20	527	第10図9	KY2−B	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2	10.2	9.4	7.1	930	安山岩
21	894	第10図6	Ⅲ区Ⅳ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2	8.9	8.2	5.4	560	安山岩
22	528	第10図15	KY2−B	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′2	11.3	9.8	7.0	1,080	安山岩
23	906	第11図2	Ⅲ区Ⅲ層	D	Ⅱ C	Ⅰ B+D′2	10.4	7.9	4.4	740	安山岩
24	904	第10図8	Ⅲ区Ⅲ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′1	8.6	8.3	4.2	810	安山岩
25	905	第11図1	Ⅲ区Ⅲ層	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2+C′2	8.7	8.7	4.1	450	安山岩
26	895	第10図10	DY4	D	Ⅱ C	Ⅰ A+D′2	9.4	8.0	5.2	630	安山岩
27	631	第10図14	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ C	Ⅰ B+D′1+C′2	11.6	8.5	5.8	910	安山岩
28	900	第11図3	DY4	D	Ⅱ C	Ⅰ E+D′2	8.9	7.3	5.6	520	安山岩
29	716	第11図7	Ⅲ区Ⅴ層	D	Ⅱ C	Ⅰ C+D′2+C′2	13.2	8.6	5.1	860	安山岩
30	898	第12図3	Ⅲ区Ⅳ層	E	Ⅱ C	Ⅰ E	20.2	15.9	3.4	1,900	安山岩
31	896	第11図13	Ⅲ区Ⅲ層	E	Ⅱ C	Ⅰ E	(14.4)	(7.4)	(12.3)	(480)	安山岩
32	786	第12図5	Ⅲ区Ⅳ層	E	Ⅱ C	2 E	28.0	20.0	4.1	3,900	安山岩
33	901	第12図6	Ⅲ区Ⅳ層	E	Ⅱ C	2 E	33.9	24.4	9.6	(2,150)	安山岩
34	897	第12図4	Ⅲ区Ⅳ層	E	Ⅱ C	2 E	30.9	(23.8)	8.3	9,950	安山岩
35	465	第12図1	Ⅲ区Ⅳ層	E	Ⅱ C	2 E	40.5	26.5	11.4	13,600	石英粗面岩
36	464	第12図2	Ⅲ区Ⅳ層	E	Ⅱ C	2 E+C′1	37.5	25.5	9.7	13,500	安山岩
37	661	第12図11	Ⅲ区Ⅴ層	F	Ⅱ C	Ⅰ B+C′2	11.1	6.9	4.9	530	安山岩
38	903	第11図8	Ⅲ区Ⅲ層	F	Ⅱ C	Ⅰ B	11.6	7.2	4.7	590	石英粗面岩

第5表　左沢遺跡出土礫器形態分類表



8．土器

今回の調査で検出された土器の大半は第Ⅲ区と称した段丘斜面及びその下面であり，復元可能土器20点を含む759点が認められた。先にも触れた様に，本調査区は道路敷地内と限定されたこともあって，遺跡の末端を精査したにすぎない。ことに左沢川によって形成された河岸段丘は河川と段丘上とは著しい比高差が現われ，集落の中心は河岸段丘の上端に広がっていることは言うまでもない。第Ⅲ区は集落の中では捨場的な（含乞層）位置に当るもので，層序の吟味からNo１～15の15枚に分けられ，さらに基本層位としてⅢ～Ⅴ層に区分したことも前述の通りである。

しかしながら，層位関係からの年代的相異は把握不可能で，Ⅲ層とⅣ層，Ⅲ層とⅤ層から検出された遺物が接合するなど適切な情報源を得ることができなかった。

そこで検出された土器群を器形，文様構成，単位文様等の相異からａ類～ｎ類に細分し，それぞれの特徴を簡単に触れるのにとどめ，層序の分析はまとめて述べることにする。

ａ類土器〔第３図版１～26，第６図版８・９，第９図版１～３〕

波状口縁をもつ深鉢形土器群であり，胴部と頸部を区画する様に平行沈線とその間内を棒状工具による刺突文を配し，口縁部文様帯と胴部文様帯と区分するグループを一括した。全体的な器形と文様構成から次の３グループに分けられる。

ａ類（第13図１，第16図18，第20図２）

第20図２を標準とするもので，外反する口縁が頸部を境にゆるやかに外曲し，口縁の傾斜角度と同じ様にそのまま底部へ向う器形をもつ。文様は波状口縁に沿って太状のL（$\frac{R}{R}$を置き，二条の沈線文とその間を埋める様に棒状工具による連続刺突文の組み合せ（以下，沈線間内刺突文と称する。）とで区画し，下半を幅広の無文帯で構成する。胴部は横位に転回するｄ類土器とした「C字状」文もしくは，入組文第21図１，第19図１的な文様を施文するものとみられる。波状は10単位である。

a^2類（第13図３～７・31，第14図５，第16図３・６，第17図23・29・34，第18図２）

a^1類に比べ外反する口縁が強く，そのために頸部から胴部にかけての曲度が著しく，胴部のふくらみが丸味を帯びる第18図２が代表的器形とみられる。口縁部文様帯は口唇部に一条もしくは二条の沈線間内刺突文を配しその下半に沿って横，斜，縦位の前々段３本多条の縄R（$\frac{L}{L}$）を中心にL（$\frac{R}{R}$，R（$\frac{L}{L}$を施文し，一条の平行沈線や沈線間内刺突文と幅細の無文帯で区画する特徴をもつ。縄文も斜縄文の他に縦位の羽状縄文第13図６・７や横位の羽状縄文を有する第13図４，第17図34もある。胴部文様帯としては平行する入組文を横走するものとみられる。波状は８単位をなす。

a^3類（第19図２，第13図11・18・22，第14図１・３，第16図14）

舌状に発達した波状口縁を特徴とし，外に大きく開いた口縁が頸部で「く」字状に内曲しなが

ら底部に向う器形を有することで，器高が低くなる。そのために波状単位が少なくなり，a^1類10単位，a^2類8単位，a^3類5単位となる。

文様構成は，口縁部の広さと併なって，波状を中心に半円状，ノ字状文，入組文，鳥の嘴状の尖状沈線等をメルクマールとして横方向に転回し，内外面にL{R/R}，R{L/L}，前々段多条縄文を充塡する場合が多く，他に摩消縄文手法を有するのもある。無文箇所はa_1類，a^2類と比較するとより丹念にヘラミガキを施している。胴部は横に転回する入組文の他に半円文，楕円文も施文するとみられる。

a^1類（第13図2・26・30・32）

平縁に沿って突起状の波状を数単位有するものであり，4点検出されている。器形はb^1類の第図2に近いものと予想される。文様は口縁部上端の沈線間内刺突文を横走するのを主に，下半をL{R/R}，R{L/L}の斜縄文の他に沈線間内刺突文を縦位に施して入組文を転回する第13図30・32もみられる。

a^2類（第13図9・10・13）

波状口縁に沿って細幅の縄文帯を施文するグループで下半を無文で構成するものである。器形は不明であるが，b類の第21図2を想定する。

b類土器〔第4図版1～19，第5図版1～3，第9図版4，第10図版1・5〕

a^3類と同様に発達した舌状5単位の波状口縁を呈するもので，口縁部の大半が無文で占められている仲間を一括した。

b^1類（第13図8・17・23・27・29，第14図6・7・10・13，第15図3，第16図4）

5の波状口縁を有し，口唇部に棒状工具による刺突文を連続している。本類の大半は発達した波状口縁を呈するものが主であるが，第13図8の様にゆるやかな口縁をなすものもある。器形は口縁から胴部にかけて直角に傾斜するため，これまでのa群土器とは対象に全体的にゆるやかな曲線を保ちながら底部に向うものと考えられる（第14図7）。また口縁上部から口唇部にかけてわずかに内曲するキャリパー的な特質も注意される。胴部文様は第15図3からみて，横位に転回する入組文（第14図7）が加わるものとみられる。

b^2類〔第14図2・4，第17図35〕

舌状に発達した波状口縁の先端が平坦で，口唇部の縁片に沿って二条の沈線間内刺突文を連続するのを特徴とする。

b^3類（第13図16・21）

b^1，b^2類と同様に発達した波状口縁を有するもので，口縁全体が無文で占める土器群を本類とした。破片であるために器形は不明と言わざるを得ないが口唇部にかけて若干の内面を示す点ではb^1類に近いものとみられる。

b²類（第13図14・15・20）

鋭角なペンシル状を示す波状と口唇に沿って貼付された粘土紐を棒状刺突で埋る特異なグループである。内外面とも丹念にヘラミガキを施してあり，焼性はきわめて良好である。

b³類（第13図19・28）

a³類と同様にゆるやかな胴部の張り出しをなし，第13図19は二条の平行沈線間内を円孔状刺突文を施こし，胴部を横長のR{L}を呈する。第13図28は地文となる縄文の後に多条斜沈線をさらに配する。

b⁴類（第14図9・11，第21図2）

胴部に縄文，口縁部から頸部にかけて無文帯を置くグループを本類とする。完形に近い第21図2で言えば，比較的ゆるやかな波状口縁から頸部までを横位のヘラミガキをなす。

C類土器〔第5図版4～19〕

底部から口縁部にかけて斜にそのまま立ち上る鉢形土器の仲間を一括した。

C¹類（第14図18・23，第15図14・15・8・20，第16図2・5・12，第17図24～26）

平行的な入組文，「C字状」文を単位文として横位に転回するグループで口縁から下胴部まで構成する。この中には口縁部に帯状の縄文帯を有するもの第1図18，第17図26と口縁部文様と区画する文様構成をもつ第15図14も含まれる。

C²類（第15図6・10・～12，第16図17）

2単位の入組文を単位文とし，横位に転回する小形土器を本類とした。

d類土器〔第7図版1～7，第10図版4，第11図版2〕（第15図9・13・17・22，第16図10・16，第17図32，第19図1，第21図7）

a^1～a^3類，b^1～b^3土器の胴部文様帯と考えられるものであり，横長に転回する入組文を有するグループである。入組文は第19図1に示す様な4単位を施すものが多く，他に第21図7の様な3単位をなすものもある。地文は充塡によるL{R/R}，R{L/L}を中心とするが他に前々段多条を施文するものもある。

e類土器〔第6図版1～7，第11図版1〕（第15図21，第16図13・15，第18図3）

平行沈線間に縦位に転回する「S」字状文で区画するグループで，a^1類～a^3類，b^1類～b^3類の胴部に構成するものとみられる。地文は第18図3が前々多条のR{L/L}{L/L}，第15図21がR{L/L}による。

f類土器〔第7図版14～16，第10図版2・3〕（第14図12・15・17，第21図6・8）

胴部が球形状を呈し，口縁が外反する小形土器を本類とした。口縁部と胴部を区画する一条の沈線をもって上部は縄文，下半の胴部は無文で構成する。縄文はR{L/L}を主に横および縦に転回することによって羽状を示すものが多い。

g類土器〔第7図版17～19〕（第1図25，第14図16，第16図7・1）

多条線文を主体にした土器を一括した。第14図16，第16図11は内曲気味に外反する鉢形土器であり，頸部を境に「(」状の多条沈線文を口縁部と胴部と同じ様に施文している。

h類土器〔第8図版1～5・22〕(第15図16，第16図4・9，第17図27，第21図1，4)

注口土器に分類される土器をまとめた。第21図1・4は口縁部片で4箇所の貯瘤をもち，他は胴部ないし，下胴部片である。

i類土器〔第8図版6～13〕(第13図24,第14図8・19・22，第15図2・7，第20図1，第21図5)

浅鉢形土器に分類されるものを一括した。口縁部に無文帯，下半部を縄文で飾るものi類とそれに横及び縦の沈線を配するものi^{3}類，2単位の入組文を横に施文するものi^{3}類，横位の多条沈線を有するものi^{4}類と分けられる。

j類土器〔第8図版14～17・20，第11図版4・5〕(第15図18・19,第16図1・8，第18図4，第20図4・3)

壺形土器を本類とする。すべて胴部に位置するものであり,器形的には胴部が球形を示すものや胴上部で外曲するもの，ゆるやかに曲線を描くものなど様々である。また第20図3，第15図19等はf類土器かa^{2}類に近いグループに属する可能性がある。文様は入組文を横走させるのが大半で第20図3は4単位，他は2単位を有するものとみられる。

k類土器〔第8図版18・19〕(第13図12，第14図21)

口縁部に無文帯および縄文帯を呈する鉢形土器であり，器形的には後述するl類に類似する。

l類土器〔第7図版8～13〕(第14図4・14・20，第15図1・3～5)

口縁部が幾分外反気味に立ち上る無文粗製鉢形土器を本類とした。

m類土器〔第10図版6，第11図版3〕(第16図19～31，第17図1～22，第20図5・6)

器面全体を縄文で施文する粗製土器を一括した。器形の多くは底部から斜に立ち上る鉢形状を有するものが主であり，口唇部の器厚なものと，すぼまるものとに分けられ，口縁が内曲気味に外に広い第16図29もみられる。地文となる縄文はL$\{\frac{R}{R}$，R$\{\frac{L}{L}$を横ないし斜位に転回するものが中心となるが,第16図30の様に2段の縄によるR$\{\frac{L}{L}$や,前々段の多条の縄によるL$\{\frac{R}{R}\}\}$もある。

n類土器〔第8図版21〕(第21図1)

DY3から検出されたスタンプ状土製品1点がある。

9．まとめ

遺跡推定面積22,100㎡のうち約16%が今回の発掘調査を実施した面積となる。調査面積が極めて少ないことや調査した範囲が遺跡の中心から離れていることもあって遺跡の性格を把握するまでには至らなかった。だが小数ながらも土器群に関しては，置賜地方では特に資料が乏しい縄文

後期中葉に位置するものであり，東北地方にありながら関東地方の影響の濃い土器群を得たことは今後の研究にとっても有意義である。

左沢遺跡の土器群はａ～ｎ類は東北南半の宝ヶ峯式（宮戸２ａ．２ｂ式），東北北半の十腰内３，十腰内４式に属し，関東地方の加曽利Ｂ２，加曽利Ｂ３式に併行するものである。a^1類，a^2類にみられるゆるやかな波状口縁は加曽利Ｂ，曽谷，安行式，十腰内４，５式が顕著であるが，本類土器に関しては加曽利Ｂ３式に併行関係を求めたい。ただし，b^1類～b^3類土器の口縁部文様帯を無文で表現するものは関東では少なく，東北的な表出法であり，胴部文様に転回する「Ｃ」字状の入組文もまた，宝ヶ峯式（宮戸２ａ，２ｂ式）の特徴である。同じ入組文でもゆるやかに曲線を描いて２単位で構成する第18図４は加曽利Ｂ２式，同様に４単位で構成する第19図１，第20図３等は加曽利Ｂ３式に多くみられるものである。a^3類，a^4類土器の様に口縁部文様帯として構成するものは，東北北半を中心とした十腰内３・十腰内４式に多く，関東の加曽利Ｂ２・Ｂ３のグループにはあまり併わない。

器形では大きく舌状に発達した波状口縁の中でも尖状を有するものは曽谷以降に多く特徴でもあり，大きく外反した口縁が頸部で著しく折曲して胴部を張り出すことにより底部と口縁部との器高を少なくする深鉢形土器はむしろ東北南半から東北北半に代表される。

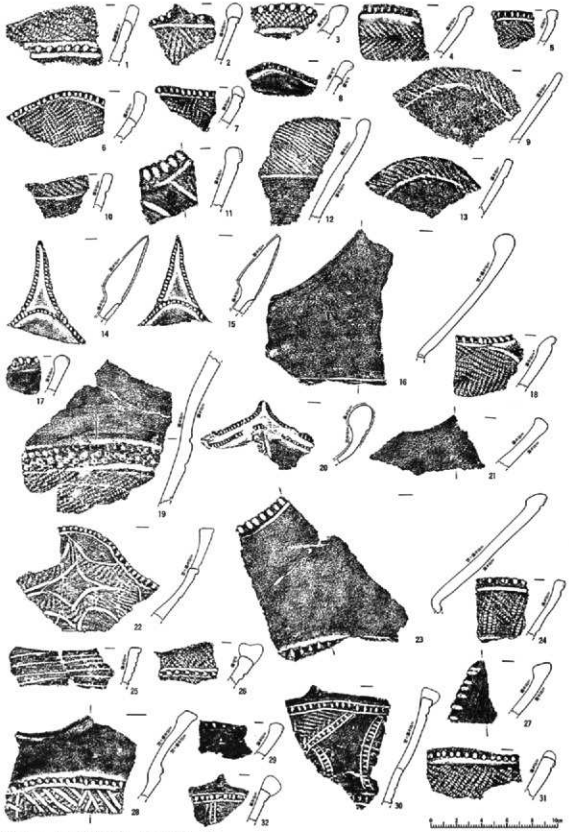
遺構では第Ⅲ層の土壙（ＤＹ３）と溝状遺構（ＫＹ２），第Ⅳ層の配石遺構（ＣＹ17），第Ⅴ層の土壙（ＤＹ４・５），その他がある。この中で第Ⅲ層面に掘り込んであるＤＹ３は埋土の堆積状況とスタンプ状土製品の検出で，墓壙の可能性を強くする。これまで県内からは50点余のスタンプ状土製品が発見されているが，土壙内からの出土は例がなく，スタンプ状土製品の用途も具体的には解明されていないことからも注目される。

第Ⅳ層面に集結した礫群ＣＹ17は，安山岩，玄武岩を主体に長楕円形状に検出されており，この中には23個の磨石も含まれている。全体的な平面プランからは規則性が把握しがたい点も多々あるが，左沢川の川床にはＣＹ17に使用された礫は存在しないことからも，自然堆積による集石は考えられない。また段丘上部から土器と共に廃棄された可能性も有りうる。しかし，ここでは配石遺構としての祭祀的な場と考えておきたい。

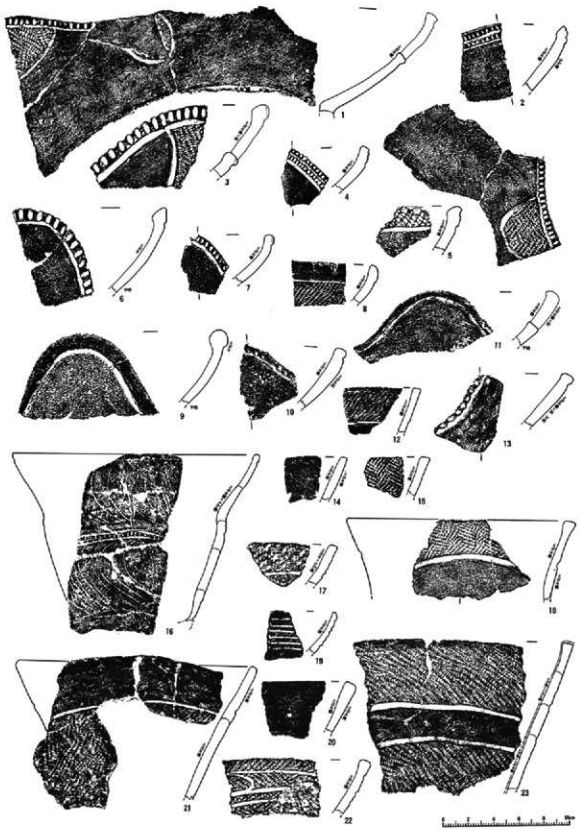
第Ⅴ層の主体的な遺構としては，ＤＹ４・ＤＹ５の浅い土壙がある。中でもＤＹ５は全体が赤く焼けて床面に土器を設しているものであり，土器も二次焼性を受けていることから捨場的な利用とともに焼性を行なったものとみられる。

本遺跡の性格であるが，段丘上，しかも最上流に存在することから，当時「サケ」，「マス」を追ってその漁撈を中心に生活を営んだ集落跡と考えられる。

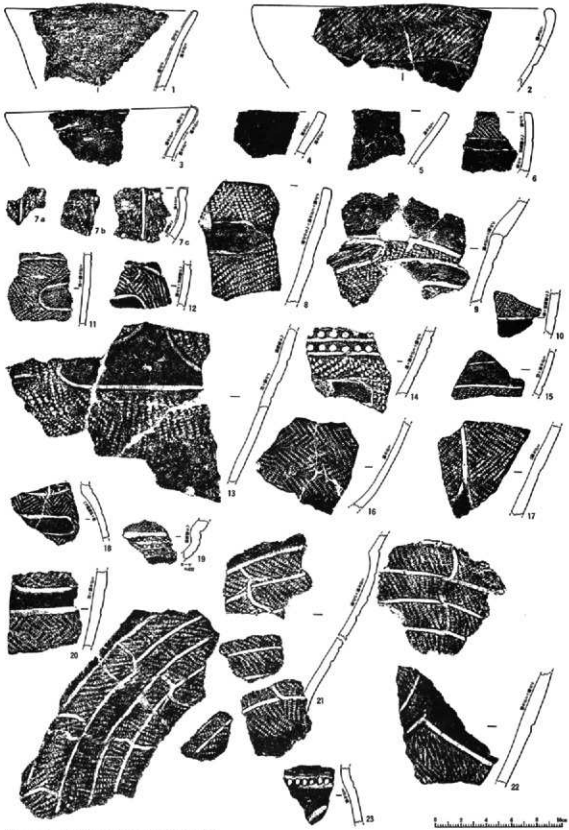
最後に，本調査を実施するに対し，地元赤崩入地区の方々には，いろいろな面においてご協力を賜り，心からお礼を申し上げます。



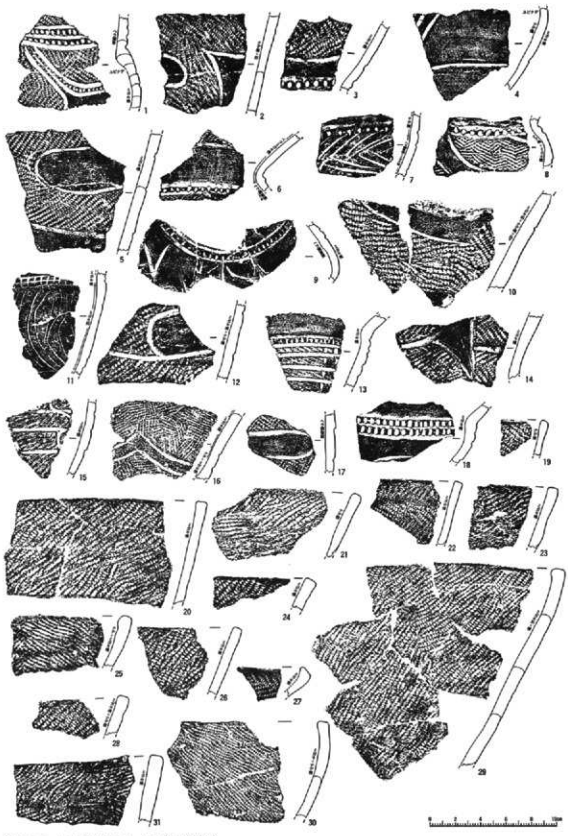
第13図　左沢遺跡出土土器拓影図(1)



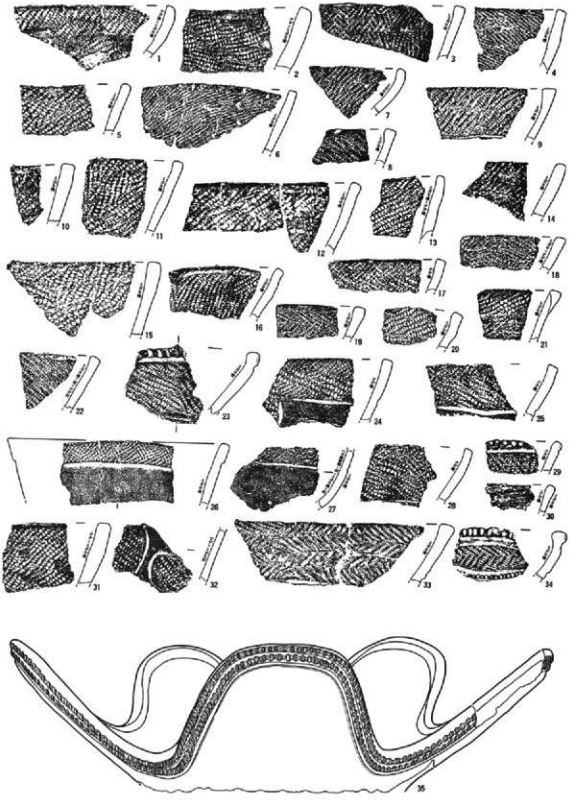
第14図　左沢遺跡出土土器拓影図(2)



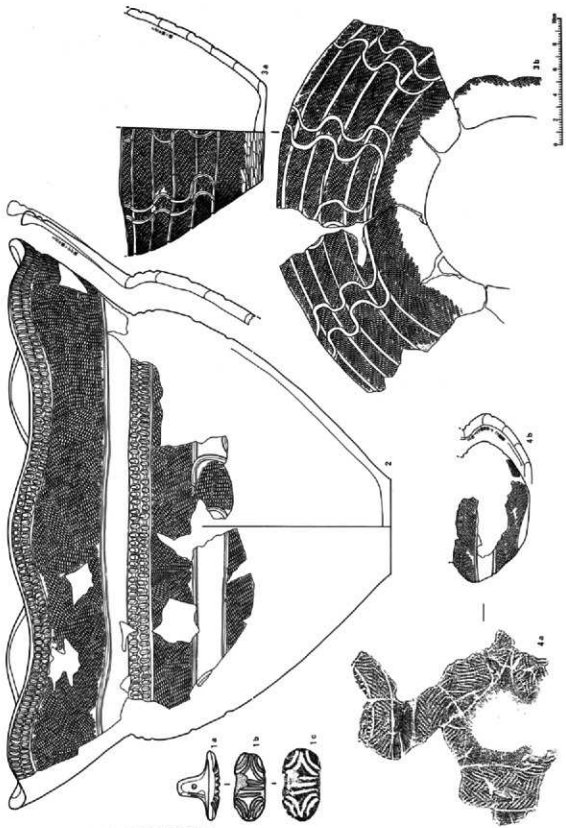
第15図　左沢遺跡出土土器拓影図(3)



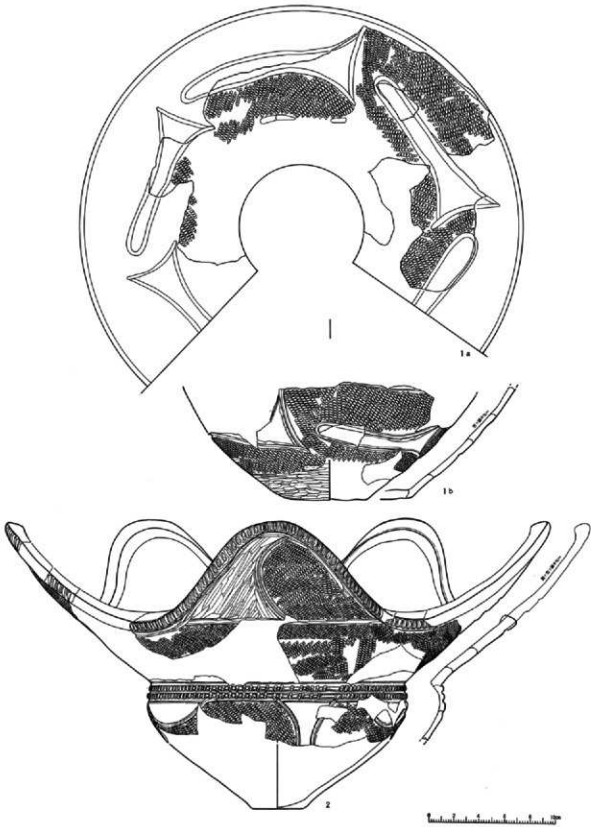
第16図　左沢遺跡出土土器拓影図(4)



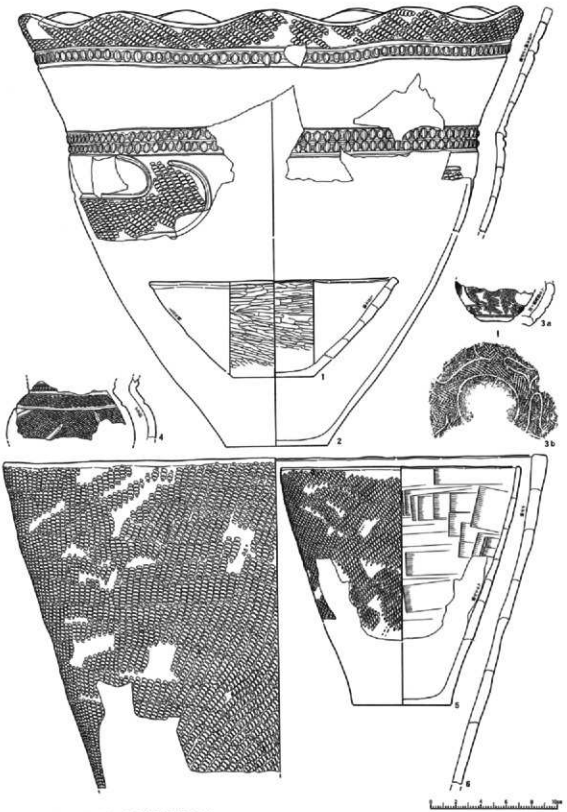
第17図　左沢遺跡出土土器拓影図(5)



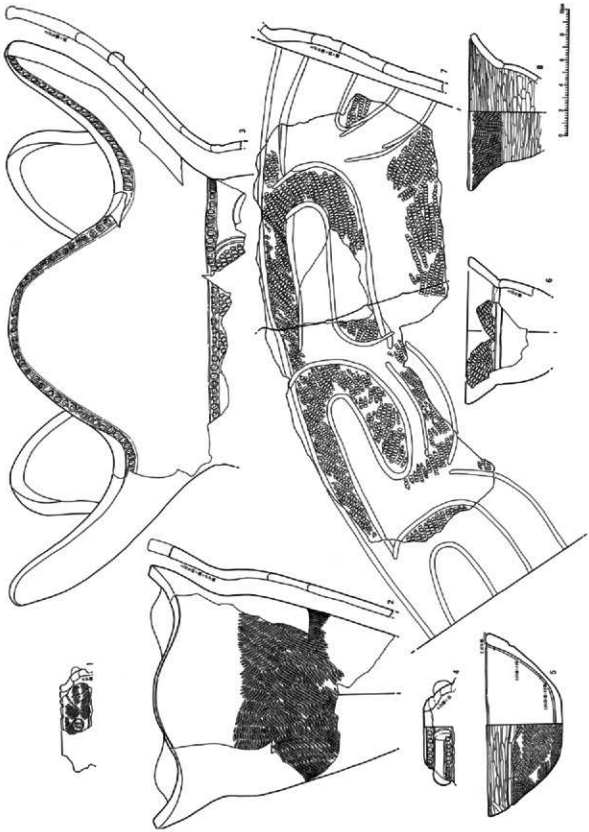
第18図　左沢遺跡出土土器実測図(1)



第19図　左沢遺跡出土土器実測図(2)



第20図　左沢遺跡出土土器実測図(3)

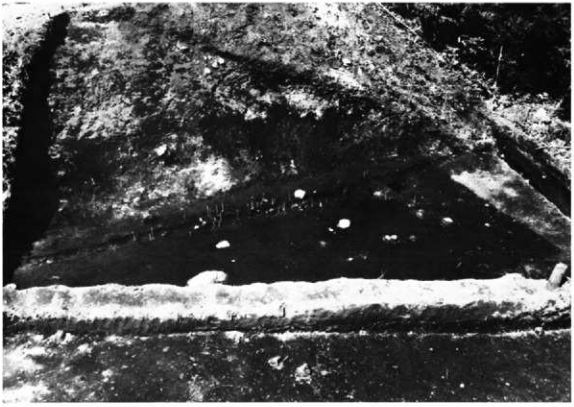


第21図　左沢遺跡出土土器実測図(4)

写真図版

第 一 図版　左沢遺跡の発掘（一）
左沢遺跡全景
第Ⅲ区Ⅲ層面遺構全景
第 二 図版　左沢遺跡の発掘（二）
第Ⅲ区Ⅳ層面遺構全景
第Ⅲ区Ⅴ層面遺構全景
第 三 図版　左沢遺跡出土の土器（一）
第 四 図版　左沢遺跡出土の土器（二）
第 五 図版　左沢遺跡出土の土器（三）
第 六 図版　左沢遺跡出土の土器（四）
第 七 図版　左沢遺跡出土の土器（五）
第 八 図版　左沢遺跡出土の土器（六）
第 九 図版　左沢遺跡出土の土器（七）
第 十 図版　左沢遺跡出土の土器（八）
第十一図版　左沢遺跡出土の土器（九）

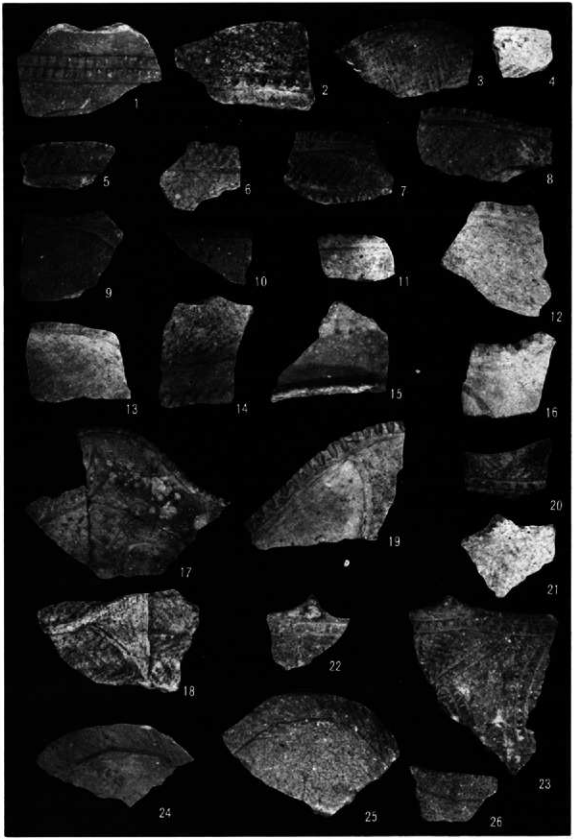
▲左沢遺跡全景



▲第Ⅲ区Ⅲ層面遺構全景

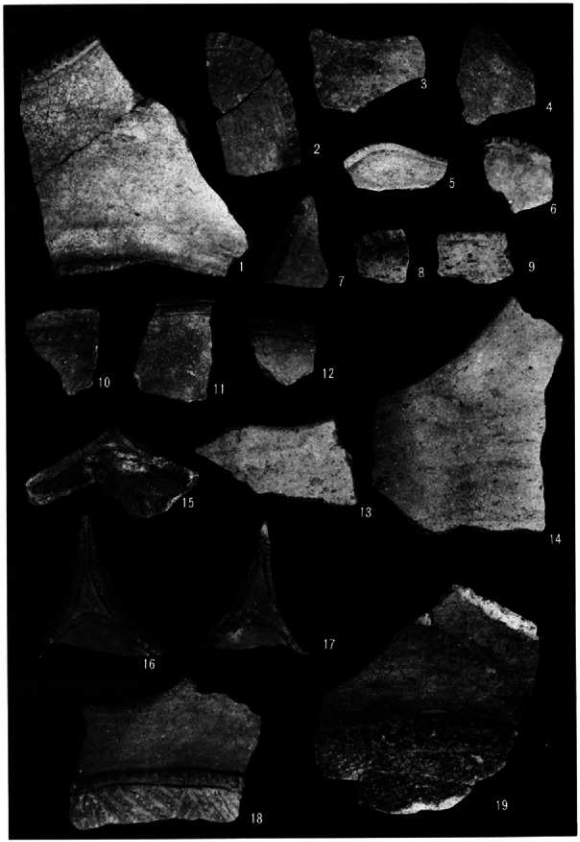
▲第Ⅲ区Ⅳ層面遺構全景，右は第Ⅳ区Ⅲ層面

▲第Ⅲ区Ⅴ層面遺構全景

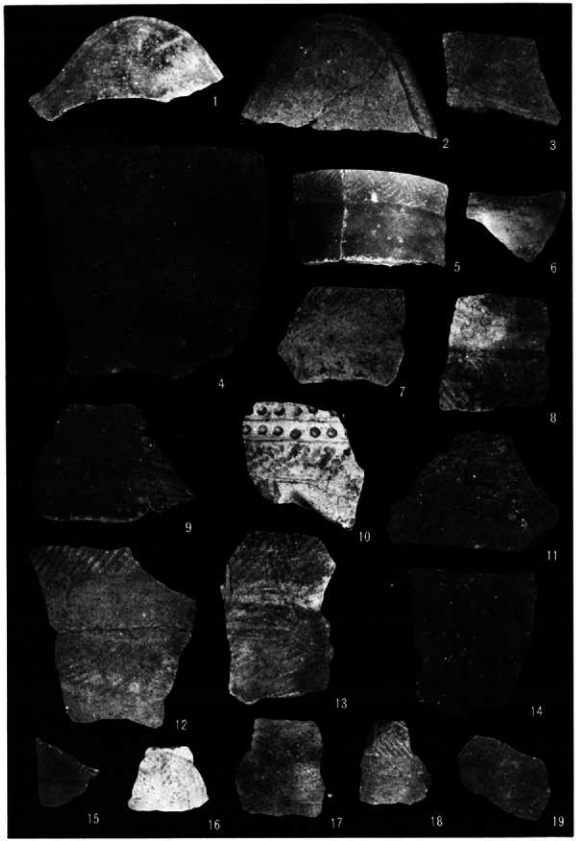


a類土器　1～26

第四図版　左沢遺跡出土の土器(一)



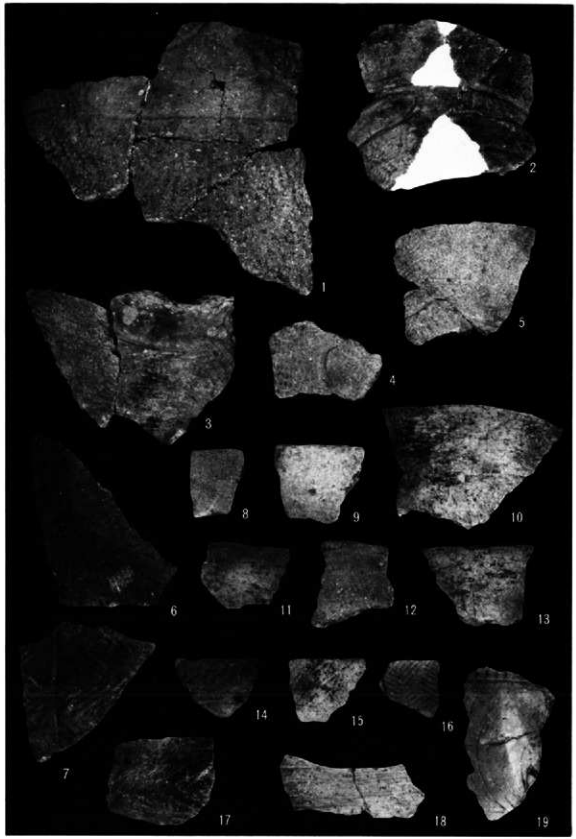
b類土器　1～19



b類土器　1～3，c類土器　4～19

第六図版　左沢遺跡出土の土器（四）

e類土器　1～7，a類土器　8・9



d類土器　1～7，f類土器　14～16，l類土器　8～13，g類土器　17～19

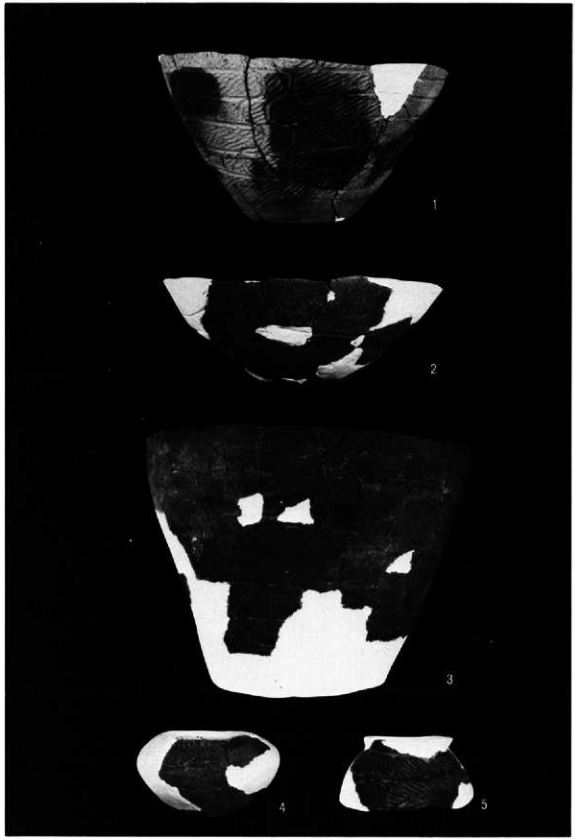
第八図版　左沢遺跡出土の土器（六）

h類土器　1～5・22，i類土器　6～13，j類土器　14～17・20，k類土器　18・19，n類土器　21

a類土器　1～3，b類土器　4

第十図版　左沢遺跡出土の土器（八）

b類土器　1・5，f類土器　2・3，d類土器　4，m類土器　6



e類土器　1，d類土器　2，j類土器4・5，m類土器　3

昭和59年３月31日発行

左　沢　遺　跡

発行　米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目１－14
置賜総合文化センター内
印刷　㈱よねざわ印刷
米沢市城西二丁目３－72